

# 海外食料需給レポート

(2019年12月)

令和元年12月26日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

## 5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2019年12月の主な動き	1
II	2019年12月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	豪州の穀物等の生産・輸出動向	3

## (資料)

1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	令和元年6月以降の食品小売価格の動向	8

## 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	7
3	米	11
II	油糧種子	
	大豆	15

## 【利用上の注意】

## (概要編)

## I 2019年12月の主な動き

写真 休眠期を迎えた中国  
山東省の小麦(12月9日撮影)

### 1 中国の生産・貿易状況

中国国家统计局の2019年の「全国糧食生産数」(2019.12.6)によれば、穀物、豆類、芋類の生産量は前年より増産となり、664百万トンと史上最高の水準。米は減産となったが、小麦やとうもろこしは増産となり、さらに、大豆はとうもろこしからの作付け転換で史上最高となる見通し。

一方、中国の穀物需要は、ASFの発生の影響などで伸び悩んでおり、米国農務省(USDA)によれば、中国の穀物在庫量は世界の2/3を占める水準に達するものとみられる。他方、豚肉の需要は、南米や米国等からの肉類の輸入によりまかなわれるとみられる。

なお、中国政府は、12月6日に米国産大豆や豚肉に対する一定数量の追加関税の免除を公表した。さらに、米中通商協定の一次合意(13日)を受け、15日以降発動予定であった米国産小麦やとうもろこしに対する追加関税(10%)についても暫定停止としたが、昨年7月以降賦課されている追加関税(25%)は維持している。



### 2 カナダの生産状況

カナダでは、9月以降の低温や降雪の影響を受け、春小麦や大豆、菜種の収穫が遅れた。カナダ統計局の12月6日公表のレポートによれば、2019/20年度の小麦の生産量は、32.3百万トンと前年度より上回るが、菜種は18.6百万トン、大豆は6.0百万トンと前年度より減少する見通し。

写真 カナダ アルバータ州  
小麦を保管している穀物エレベーター



### 3 南米の生産・貿易状況

ブラジルやアルゼンチンの大豆やとうもろこしの作付け及び発芽は11月から12月上旬にかけての降雨を受け概ね順調に進展している。2020年1月以降、生育期から成熟期にかけて降雨に恵まれれば、2年連続の豊作が期待されている。

なお、中国への肉類の輸出増に伴い、穀物・大豆の国内飼料向け需要が増加することにより、輸出余力の減少が懸念されている。

また、アルゼンチンのフェルナンデス新政権は12月14日、財政赤字の改善のため、穀物や大豆、肉類等の輸出税について引上げを決定した。とうもろこし、小麦については、現行の約7%から12%へ、大豆、大豆油かす等については約25%から30%へ引き上げられる見通し。今後、財政状況等により、さらなる引上げも検討されているとの情報もあり、アルゼンチン産穀物等の輸出に影響するとみられる。

## II 2019年12月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月下旬、180ドル/トン台後半で推移。ロシアやウクライナの増産による世界的な小麦の供給はあるものの、アルゼンチンや豪州での乾燥による作柄懸念に加え、12月中旬、アルゼンチン輸出税引き上げ報道により上昇し、12月下旬現在、190ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、11月下旬、140ドル/トン台前半で推移。12月上旬に小麦価格上昇につれ上昇し、140ドル/トン台後半で推移。中旬の米国農務省需給報告で、世界の期末在庫が上方修正されたことから、下落したものの、同じく中旬の米中通商協議進展及びアルゼンチン輸出税引き上げの報道により上昇し、12月下旬現在、150ドル/トン台前半で推移。

米は、11月下旬、440ドル/トン台前後で推移。タイ産米価格は、パーツ高に加えインド、ベトナム産米に比べ割高なため、特にアフリカ諸国からの輸入需要に乏しいことからほぼ横ばいで推移し、12月中旬現在、440ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、11月下旬、330ドル/トン台前半で推移。12月中旬の米中通商協議進展及びアルゼンチン輸出税引き上げの報道により上昇し、12月下旬現在、340ドル/トン台前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## III 2019/20年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から7.3百万トン上方修正され26.7億トン。消費量は、前月より0.4百万トン下方修正され26.6億トンとなり、生産量が消費量をわずかに上回る見込み。

また、期末在庫率は前月から上方修正され30.0%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前月と比較して、小麦で下方修正、とうもろこし、米で上方修正。穀物全体では上方修正され26.7億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦、米で下方修正、とうもろこしで上方修正。穀物全体では下方修正され26.6億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、米で下方修正され、4.3億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0億トンと前月より上方修正され、期末在庫率は上方修正。

(注：数値は12月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2019/20年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前月から上方修正され5.7億トン。消費量は前月から上方修正され5.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から上方修正され、19.0%となる見込み。

(注：数値は12月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

## V 今月の注目情報:豪州の穀物等の生産・輸出動向

豪州の穀物・油糧種子の生産量は、2018/19年度から2年連続で干ばつの影響を受けたことにより、3年連続の減少となった。2019/20年度は、30.6百万トンと、前回2年連続の干ばつとなった2007/08年度(30.0百万トン)以来の12年ぶり低水準となる見込み。

また、生産量の減少を受け、豪州の穀物・油糧種子の輸出量は大きく減少し、輸出市場における豪州のシェアは大幅に低下することとなった。

豪州の穀物・油糧種子生産に関し、干ばつの影響と貿易動向についてまとめた。

### 1 豪州の穀物・油糧種子生産

#### (1) 2年連続の干ばつ

本年の12月中旬に入り、豪州全土の平均最高気温は40度を上回り、史上最高を更新している。

豪州農業資源科学経済局(ABARES)の「Australian Crop Report」(2019.12.3)によれば、豪州の穀物・油糧種子生産量については、2018/19年度は東部(ニューサウスウェールズ(NSW)州、クインズランド(QLD)州)が干ばつの影響を受け、豪州全体で33.6百万トンと平年(過去10年平均)より減産となった。

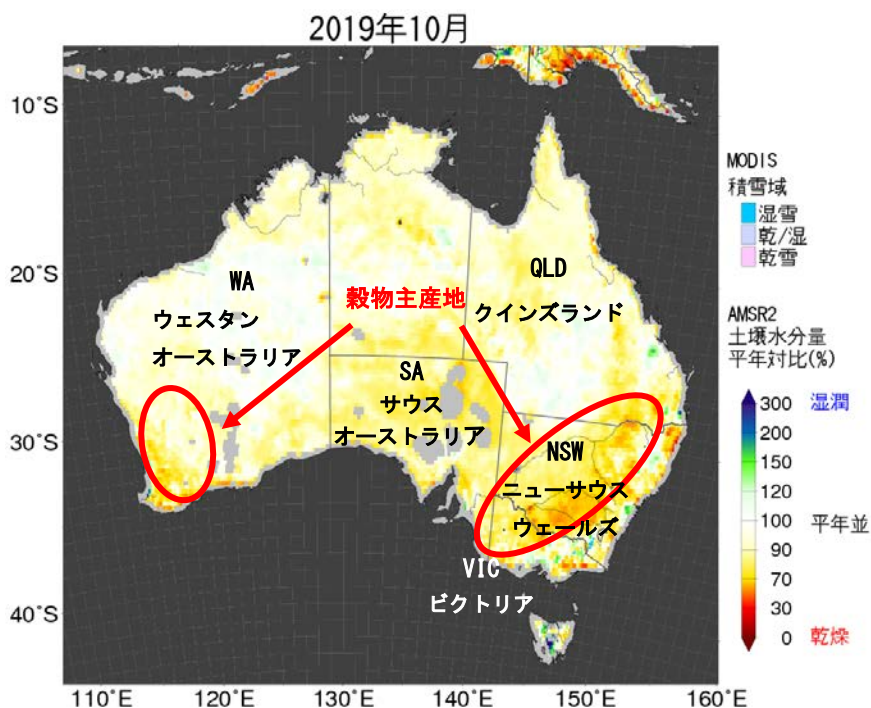
2019/20年度はさらに干ばつの影響が西部(ウェスタンオーストラリア(WA)州)にも広がり、豪州全体で30.6百万トンと前年度以上に減産となる見通し。

#### (2) 品目別の状況

穀物・油糧種子の中で、冬作物については、豪州全体で広く栽培されており、5~6月頃作付けされ、12月に収穫期を

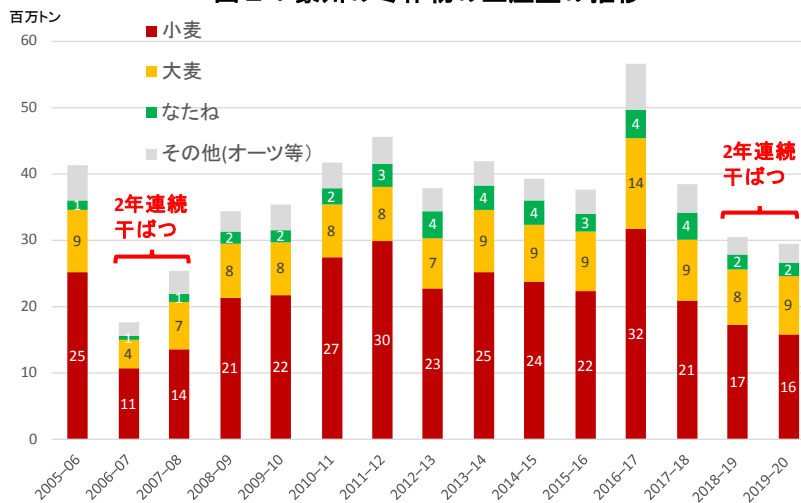
図1: 10月の豪州の土壤水分データの平年対比

豪州全土で平年より土壤水分が少ない



出典: JAXA JASMAI データ

図2: 豪州の冬作物の生産量の推移



出典: ABARES 「Australian Crop Report」(2019.12.3)

迎えている。

この中で生産量の最も多い小麦は、干ばつで減産となった前年度(17.2百万トン)をさらに下回る15.9百万トンの見通し。これは2年連続の干ばつとなった2006/07年度(10.8百万トン)、2007/08年度(13.6百万トン)以来の低水準。なたねも2.1百万トンと同じく前年度(2.2百万トン)より減産の見通し。一方、大麦は、比較的干ばつの影響を受けなかったとみられ、8.7百万トンと前年度(8.3百万トン)より増産の見通し。

夏作物は、主に豪州東部のNSW、QLDの2州で栽培されている。通常であれば10月頃作付けを行い、12月には生育期を迎えるが、2年連続で灌漑用水の不足により大幅に作付面積が減少した。豪州東部の干ばつの影響が西部に比べ大きく、夏作物の生産量の減少が目立っている。

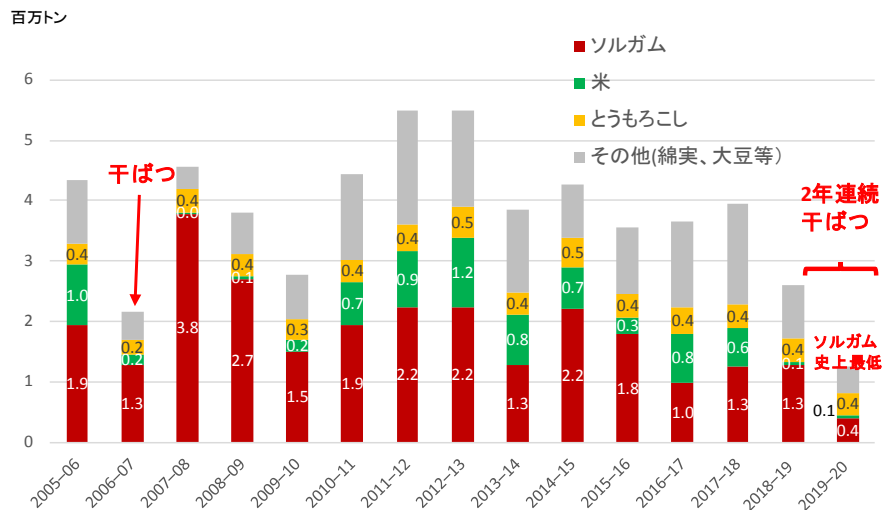
米は2年連続で大きく生産量を減少させ、2019/20年度はもみベースで5万トンの見通しで、過去10年間の平均63万トンの1/10以下である。飼料

用のソルガムに至っては、干ばつの前年度(128万トン)のさらに1/3以下となる40万トンの見通しで、史上最低となるとみられる。

写真：豪州ウェスタンオーストラリア州の小麦の収穫  
(10月27日撮影)



図3：豪州の夏作物の生産量の推移



出典：ABARES「Australian Crop Report」(2019.12.3)

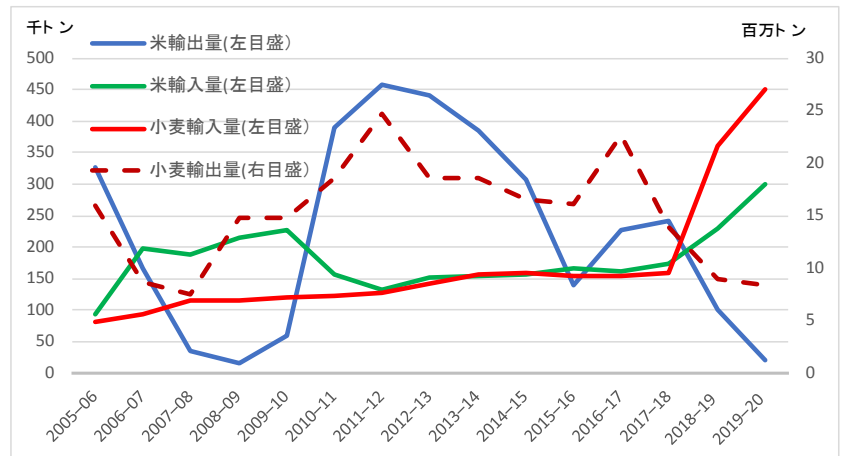
## 2 豪州の穀物・油糧種子輸出

USDAによれば、2年連続の干ばつの影響を受け、豪州の穀物の輸出量は、2018/19年度は13.3百万トン、2019/20年度は12.8百万トンと2017/18年度(20.8百万トン)から大きく減少する見通し。

うち、小麦の輸出量については、2018/19年度が9.0百万トン、2019/20年度が8.4百万トンと大きく減少した。これにより、増産

図4：豪州の小麦と米の輸出入量の推移

最近2年は干ばつによる減産から輸出が減少、輸入が増加



出典：米国農務省「PS&D」(2019.12.10)



とルーブル安等を背景に、安価な価格で輸出攻勢をかけてきたロシア、ウクライナに東南アジアの輸出市場を奪われ、またカナダに中国向け輸出市場も奪われる等、豪州の輸出シェアは大幅に減少している。一方、豪州は不足する食糧用小麦をカナダから輸入する等、2019/20 年度に輸入量が 45 万トンまで増加する見通し。

また、米については、中・短粒種の輸出国であったが、2 年連続の干ばつによる生産減により純輸入国に転じ、これまでの輸出先の中近東等の市場は中国に奪われたとみられる。このような中、豪州の米取引業者であるサンライス社は、干ばつによる豪州産米の取扱量の減少の影響を緩和するため、前年、ベトナムの精米工場を買収するといった動きも見られる。

さらに、史上最低の生産量となったソルガムについては、南米のとうもろこしが豊作のため、豪州産ソルガムの輸出市場は南米産とうもろこしに取って代わられたとみられる。

### 3 輸出市場におけるロシア、ウクライナ、南米の台頭と豪州のシェア低下

今般の干ばつによる影響を過去の事例と比較して分析してみたい。前回 2 年連続で干ばつとなった 2006/07 年度、2007/08 年度は、豪州等の小麦生産国の減産・輸出減により、穀物需給が逼迫し、世界の小麦の期末在庫率は 20.8% と低下した。その結果、シカゴの小麦相場は高騰し、2008 年 2 月に史上最高の 12.8 ドル/ブッシェル(期近物)となった。

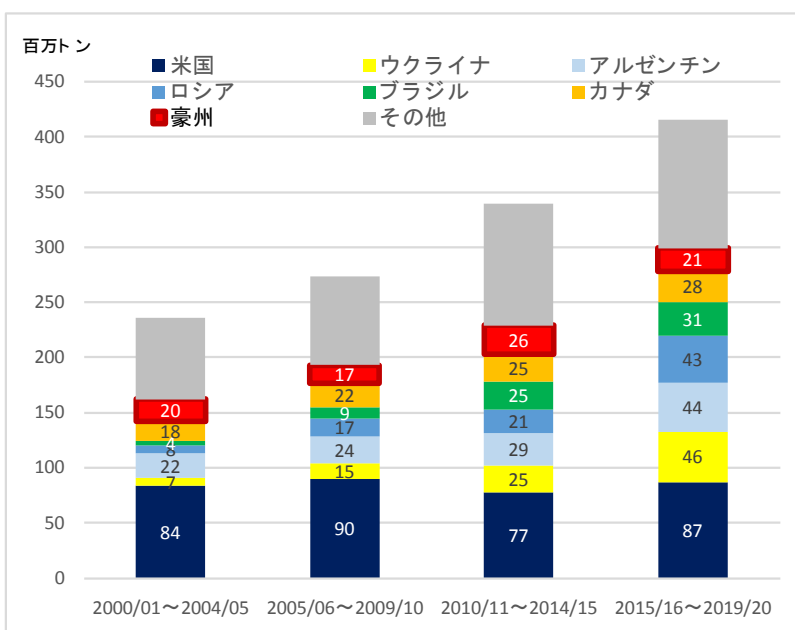
これに対し、今回は、豪州が 2 年連続不作で輸出量が減少しても、ロシアやウクライナ、南米等の増産でカバーされ、世界的には穀物供給が潤沢であり、穀物の期末在庫率は 30% で、小麦についても 38% と高水準である

過去 20 年を 5 年ごとに区切って主要穀物輸出国の輸出量の推移を算出したところ(図 5 参照)、2000/01～2004/05 年度については、穀物輸出では、豪州が、米国に次ぐ地位を争い(シェア 8%)、豪州の穀物の生産・輸出の増減が世界の穀物需給に一定の影響を与えていた。しかしながら、最近の 5 年間(2015/16～2019/20 年度)は、ロシア・ウクライナの小麦、南米のとうもろこしの増産により世界の穀物輸出に占めるシェアが大幅に増加したため、相対的に豪州の輸出シェアは減少(5%)した。さらに、ここ 2 年間は豪州の減産によりシェアは 3% と大きく下落している。

このように、穀物価格が高騰した 2007/08 年度と比較して、現在の世界の穀物貿易に占める豪州の輸出シェアが低下していることから、今回の豪州の生産減少が世界の穀物需給に与える影響は限定的とみられている。

図 5：主要穀物輸出国の輸出量の推移(5 年間平均)

近年、ロシア、ウクライナ、南米の台頭により**豪州のシェア低下**



	2000/01～2004/05	2005/06～2009/10	2010/11～2014/15	2015/16～2019/20
豪州シェア(%)	8.4	6.1	7.9	5.0

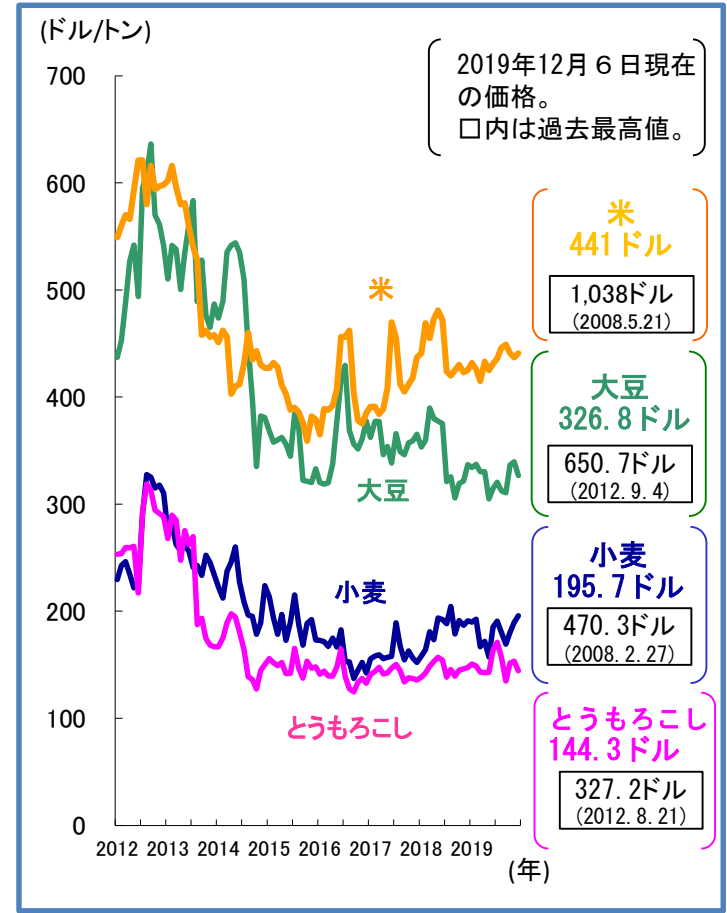
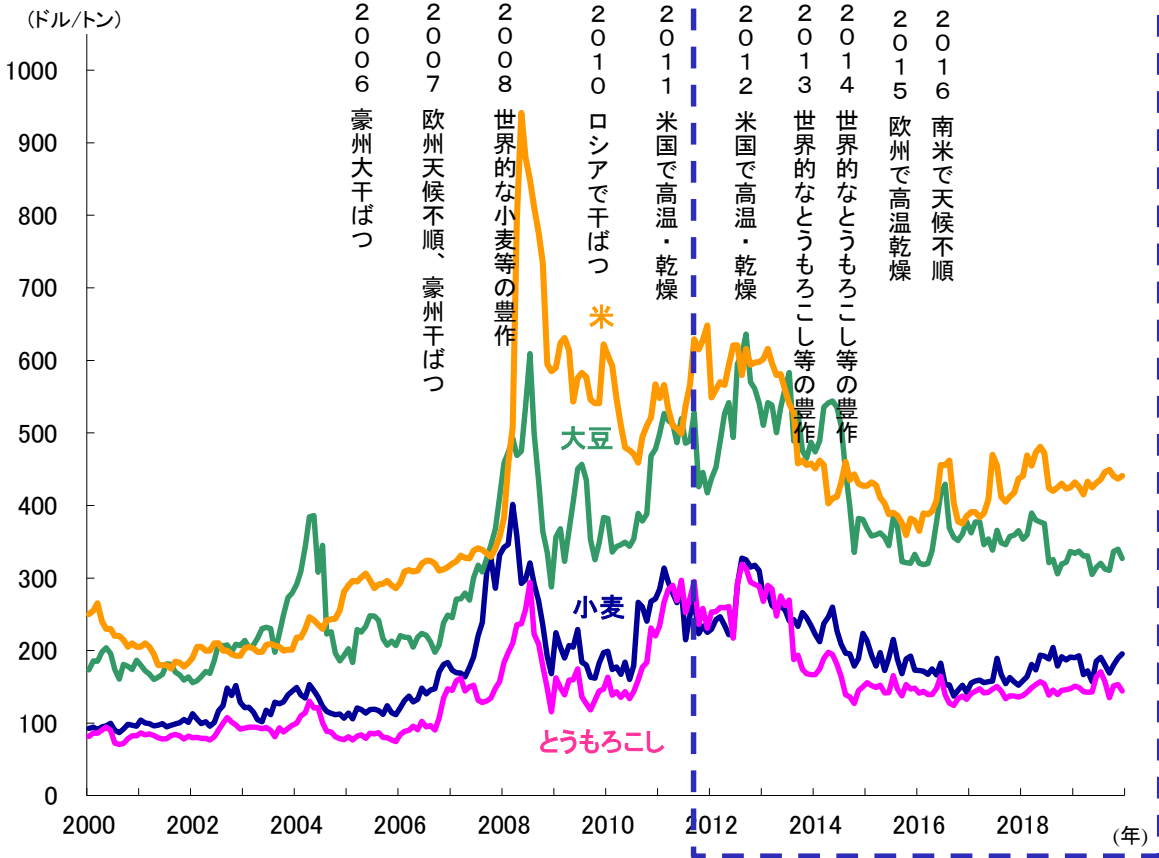
出典：米国農務省「PS&D」(2019.12.10)

穀物は小麦、大麦、ライ麦、オーツ麦、とうもろこし、米、ソルガム、ミレット、その他穀物の計

# 資料1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米は、2013年以降、タイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。
- なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## □ 穀物等の国際価格の動向



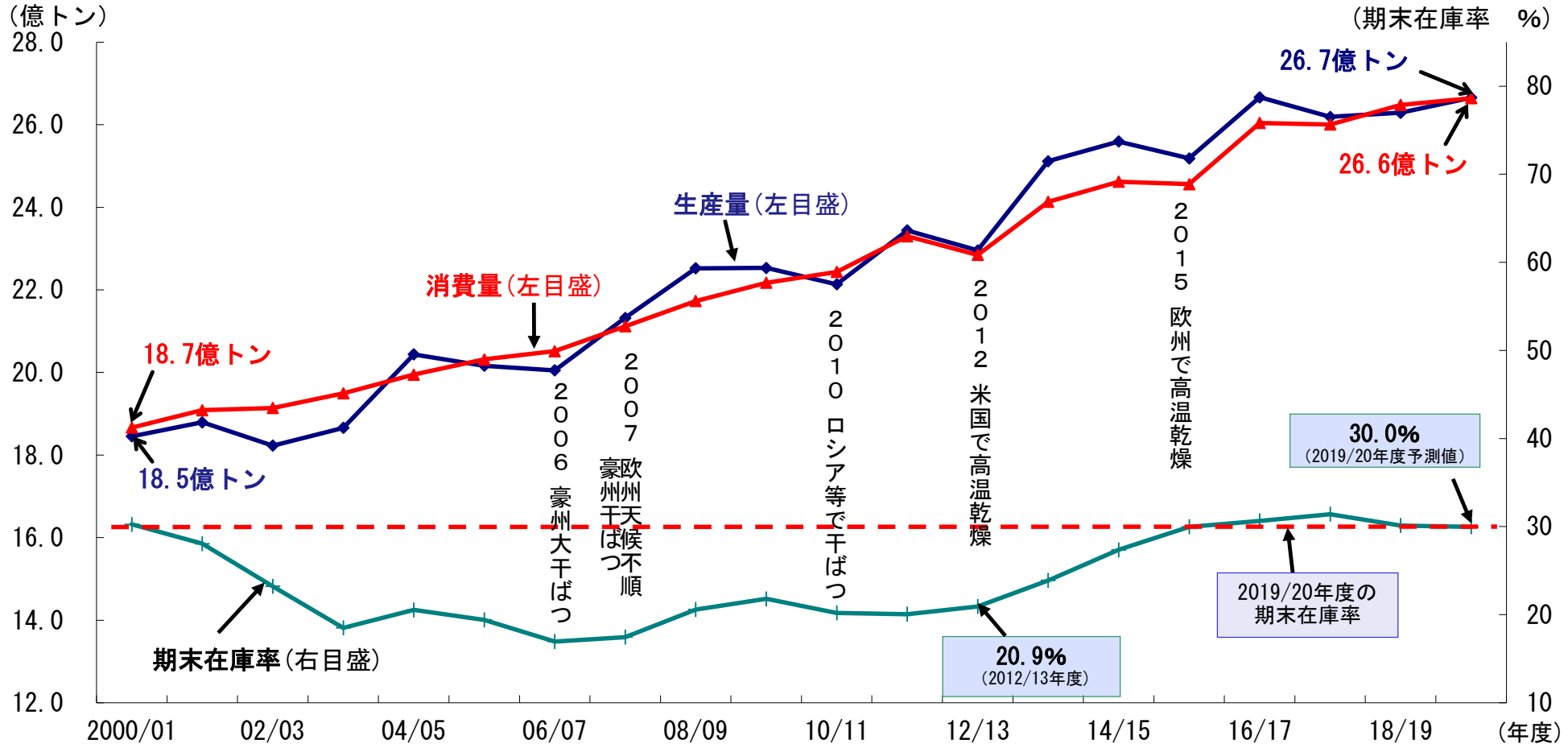
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。(なお、12月6日現在の米価格は11月27日の価格。)

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2019/20年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2019/20年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回り、30.0%となり、直近の価格高騰年の2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### □ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2019)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料3 令和元年6月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

## 令和元年6月～令和元年11月の食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
品目	H26	H27	H28	H29	H30	R元						上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
生鮮食品を除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.6	101.5	101.7	101.6	102.0	102.2	0.5%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	102.6	102.2	102.4	102.4	102.0	-0.5%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	103.5	104.9	105.0	106.0	105.8	105.4	6.5%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.3	101.1	101.0	101.4	101.5	101.2	0.4%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.4	93.3	92.1	92.9	92.9	93.0	-0.2%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.6	101.4	101.3	102.0	101.3	101.8	2.5%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	100.5	103.3	103.8	103.9	102.3	104.3	0.6%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.6	102.5	102.4	102.4	102.2	0.0%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.9	95.2	94.1	95.6	94.7	93.6	-2.2%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

## 【参考】令和元年7月～令和元年12月の食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)													
品目	H26	H27	H28	H29	H30	R元						上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	102.7	103.2	102.1	103.0	103.4	103.0	-0.4%	-1.2%
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	107.9	108.5	108.5	107.9	107.9	108.5	0.6%	6.5%
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	96.3	95.1	95.5	94.7	94.7	94.7	0.0%	-1.7%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	101.4	99.2	99.9	98.6	98.9	98.3	-0.6%	-2.8%
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	110.3	110.6	111.0	111.5	110.6	111.0	0.4%	-1.2%
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.8	105.8	107.4	106.4	106.4	106.4	0.0%	-1.8%
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	102.7	102.7	102.7	103.0	103.0	0.0%	0.5%
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.1	101.4	103.1	102.1	100.0	100.7	0.7%	-3.0%

資料: 農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。